

結論を先にいうと、現時点での Web ページによる情報提供という目的に対する解としては、XHTML を選択すべきです。XHTML は拡張性に優れ、モジュールなどの追加を行うことができます（これは XML にもいえます）。XML では、状況に応じてスキーマ（XML 文書が取り得る構造や言語設計者の意図を示すもの）を記述し、文書交換に活用します。スキーマを記述する言語には DTD、XML Schema、RELAX NG、XML Data Reduced などがあるため、XML を扱う場合はこれらの知識が必要となる場合があります。

一方 XHTML では、文書の構造は W3C によって定義された DTD で示すことになっているため、XML を習得するよりも比較的敷居が低く、同様に受け手も情報を手軽に受け取ることができます。また、XHTML は HTML を XML で再定義したものであるため、HTML に慣れ親しんだ人にはさらに敷居が低くなることでしょう。

しかし、だからといって XHTML 以前の HTML は拡張性がなく、今後の発展もないから駄目だということでもありません。SGML ベースである HTML は、いったん 4.01 で最終バージョンとされていたので、新しい技術を取り入れるよりもすでに習得した知識で対応したいという場合や、文書の永続性が最優先と考えるなら、XHTML ではなく HTML 4.01 を選択するのもまた 1 つの正解といえます（現在は新たに HTML 5 を策定しようとする動きもありますが、2008 年 1 月 22 日に公開草案初版が公開されたばかりです。HTML 5 が勧告となるまでは、HTML 4.01 が SGML ベースの HTML の最新バージョンであることには変わりありません）。

ここで重要なのは、単に HTML や XHTML でマークアップした文書を作成して公開すれば、それが Web Standards に沿った Web ページなのか、ということです。

Column HTML 5

本文中で「HTML は、いったん 4.01 で最終バージョンとされていた」と書いています。1999 年 12 月 24 日に HTML 4.01 が W3C 勧告となった後、2000 年 1 月 26 日に XHTML 1.0 が W3C 勧告となり、W3C による HTML の仕様は XHTML にシフトしていったため、HTML は 1999 年 12 月 24 日の W3C 勧告版が最終バージョンとされたのです。

しかし、W3C が提唱する XHTML の方向性に Apple や Mozilla、Opera は異を唱え、WHATWG（Web Hypertext Application Technology Working Group, <http://www.whatwg.org/>）を 2004 年に立ち上げ、XHTML ではない新たな HTML として、Web Applications 1.0 という仕様の策定を開始しました。

WWW や HTML の考案者である Tim Berners-Lee は、2006 年 10 月に「W3C 内に新しい HTML の作業部会を発足する」という意向を発表し、2007 年 3 月に新たな HTML WG が立ち上げられました。2007 年 4 月に WHATWG から W3C への提案がなされ、その結果 2007 年 5 月に Web Applications 1.0 が HTML 5 に改称（<http://lists.whatwg.org/pipermail/whatwg-whatwg.org/2007-May/011228.html>）、2008 年 1 月 22 日に HTML 5 の公開草案初版（<http://www.w3.org/TR/2008/WD-html5-20080122/>、<http://www.whatwg.org/specs/web-apps/current-work/>）が公開されました（W3C は、2010 年 9 月までに標準化作業を終える予定としています）。